

## 09 ロシア、ブリヤート国立大学における 日本語・日本文化の教育の現状

ボトーエフ・イーゴリ

ロシア全体の日本研究の歴史と現状に関しては、『世界の日本研究2014』においてエカテリーナ・レフチェンコ氏の「ロシアにおける日本研究の歴史と現在」というレポートが紹介している。本報告では、ロシア国内の一つの東洋学の拠点である、ブリヤート国立大学の制度に基づいて、現在のロシア連邦の大学における日本語・日本文学・日本文化の教育制度の特徴について述べる。

ブリヤート国立大学 (Buryat State University) の始まりは、全シベリアの小・中・高等学校の教員養成を目的として、1932年設立のブリヤート国立教育大学に遡れる。今現在のブリヤート国立大学は、「教育大学」の狭い範囲を超えて、13の学部、3の分校と1の専門学校から成る、典型的な総合大学となっている。その13の学部のなかで、最も新入生の人気を集めているのは東洋学部だと言っても過言ではない。その人気の理由は様々ある。まずは、地政学的な要因である。ブリヤートは歴史的に西洋文明と東洋文明が接触する地域に位置して、ヨーロッパやロシアなどの多くの東洋学者にとって、古くから数多くの探検の出発点であった。もう一つの重要な理由はブリヤート人の民族的属性にあると考えられる。ブリヤート人は大きなモンゴル民族の一つの部族であり、ロシア人の東洋学者は、18世紀からブリヤートの居住地をモンゴル研究の拠点にしていた。モンゴル学のブリヤート派こそが、現在のブリヤート国立大学東洋学部の基盤を作った人々であった。

現在の東洋学部は、ブリヤート語講座、ブリヤート文学講座、シベリア少数民族語講座、極東地域文学講座、中央アジア文学講座、アジア地域学講座という、6つの講座から成る。学生はここで、モンゴル語をはじめ、ブリヤート語、日本語、中国語、韓国語、トルコ語、チベット語、エヴェンキ語を学ぶことが出来る。選べる専攻としては、言語学専攻、文学専攻、地域学専攻と観光学専攻が設置されている。

日本学科は極東地域文学講座に所属し、学科の教員構成は以下のとおりである。

1. Zhantsanova Marina氏 (准教授、現代日本文学 [宮本輝] 研究)
2. Botoev Igor氏 (准教授、日本文学の翻訳と異文化コミュニケーションの諸問題)

3. Marheeva Tuyana氏（講師、現代日本語固有名詞の研究）
4. Badmadorzhieva Vera氏（助教、日本の民話伝承の研究）
5. Sedenjab氏（外国人講師、プリヤート語と日本語助詞の比較研究）
6. 尾上慶子氏（外国人講師、日本語会話の教授方法の研究）

2016年現在の学生数は37名である。ロシアの東洋学の名門モスクワ国立大学、サンクトペテルブルグ国立大学と極東連邦大学（ウラジオストク市）の東洋学部と比べると、「授業料が比較的安い」、または「交換留学制度がある」「学生寮がある」「市内の治安が良い」などの理由で、シベリア全地域（プリヤート共和国、ハカス共和国、トゥヴァ共和国、ザバイカリエ地方、アルタイ地方、イルクーツク州、スヴェルドロフスク州、チェリャビンスク州など）だけではなく、ロシアのヨーロッパ地域（コミ共和国やウドムルト共和国など）からの入学生数も、徐々に増えつつある。専攻東洋語の選択科目の人気度ランキングでは、中国語は1位、韓国語は2位、日本語は3位という状況が長年続いていたが、「ロシア国内の「韓国ブーム」が収まった」、または、「日本文化の人気度が高くなった」という理由によって、日本語・日本文化に関する興味を示した入学者数（2016年度）が約3倍に増え、今現在、日本語は2位になっている。

ロシアの大学の教育制度の特徴として、学生が自由に授業科目を選択できないことが一般的である。入学から卒業までの4年間の全授業科目は、ロシアの文部科学省に認定された「東洋学部における教育プログラム」によって定められている。プリヤート国立大学における、日本語・日本文化関連の全授業科目の年次割当は資料1のとおりである。

また、本大学内の授業の他、学生は、交換留学生として協定大学の山形大学に留学し、1年間にわたって「日本語・日本文化」関連の授業を受けることができる。交換留学生の人数制限のため、日本留学に行けない学生数は、残念なことに少なくないが、彼らは大学毎年の夏休みに実施している「東洋学のサマーキャンプ」や招待講演などに出席して、日本人先生の授業を受けことができるようになっている。

日本語・日本文化関連の授業と並んで、学生が日本研究の方法を習得するための研究指導制度は非常に大事な役割を果たしている。日本語・日本文化専攻の学生は、1年目の後期に自分の好みに合わせて自由に研究テーマを選択することができる。2016年現在の学部生の研究テーマは資料2のとおりになっている。

研究テーマ一覧を分析してみると、学生の興味は日本語・日本文学の研究から

資料1 日本語・日本文化関連の年次別授業科目一覧（2016年現在）

年次	入学年	人数	授業科目名
1年	2015年	19名	日本語初級文法・語彙
			日本語リスニング
			日本学入門
2年	2014年	8名	日本語基本文法
			日本語リスニング
			日本語会話
			日本文学入門
			日本史
3年	2013年	5名	日本語史
			日本語会話
			ビジネス日本語
			文法論
			翻訳論
			文体論
			テキスト分析論
			日本文化論
			日本宗教史
			日本古典文学
			日本近代文学
日本経済			
4年	2012年	5名	日本語会話
			文法論
			翻訳論
			文体論
			テキスト分析論
			日本現代文学
			日本文化論
日本社会政治論			

日本文化の研究へ変わっていく傾向が見られるようになった。また、最近の学生は、「本格的な研究分野にならない」という理由によって、およそ10前までタブー視された「ホラー小説」、「妖怪」、「心中」、「怪談」、「SM思考」、「アニメ・漫画」などの日本文化の要素を、自分の研究対象に選択するようになっている。

ロシアの他の大学と比べると、ブリヤート国立大学の学生は積極的に、地方の民族的な要因を挙げて、「日本文化とブリヤート文化」や「日本語とブリヤート語」などのような比較研究を試みている。学生の研究結果の発表の場は、ブリヤート

資料2 年次別の研究テーマ（2016年現在）

年次	入学年	研究分野	研究テーマ
1年	2015年	日本語	日本語の機能的な特徴
			日本語文体の特徴
			現代日本の言語的状況
			日本語の語彙論
			日本語の方言
			日本語の翻訳方法
		日本文学	日本ホラー小説の研究
			日本の演劇とロシア文学からの影響
		日本文化	日本国家の神話的起源思想
			浮世絵の研究
			日本人名の研究
			日本民話における日本人の発想法
			日本文化における「お化け」の表象
			日本文化における「死」の表象
			日本史における明治維新の役割
日本の教育制度の諸問題			
日本の伝統芸能の研究			
日本の妖怪の研究			
日本画の研究			
2年	2014年	日本語	英語語彙の日本語化メカニズム
			日本語の敬語体系の特徴
		日本文学	室町時代の軍記物の研究
			現代日本文学の短編小説の研究
			20世紀後半の日本女性文学の研究
			日本の推理小説の特徴
		『万葉集』における恋愛の表象	
日本文化	日本民話伝承における「人間」の表象		
3年	2013年	日本語	現代日本語における外来語彙の構成変化
		日本文学	夏目漱石による日本西洋化の批判
			日本典型文学における「朱」の象徴的意味
			大岡昇平の文学活動の研究
日本文化	日本の民話伝承における「お化け」の役割の研究		
4年	2012年	日本語	日本文学の翻訳におけるシンタクシス的変更について
			現代日本語におけるネーミングの方法
		日本文学	日本の歴史・時代小説の研究
			読本における中国文学からの影響
			近松門左衛門の文学作品における「心中」の表象
日本文化	日本における「狐」の表象について		

2015年 卒業生	2011年	日本語	日本古典文学における地名の特徴 関西弁における動詞の打ち消し活用形の特徴について				
		日本文学	『百人一首』の研究 『新古今和歌集』の研究				
			日本文学における社会派推理小説の役割について				
2015年 卒業生	2011年	日本文化	日本文化における天照大神の表象について 日本文化における七福神の表象について				
			2014年 卒業生	2010年	日本文学	小林一茶の作品における自伝的記憶の特徴について 井上靖著『おろしや国酔夢譚』における「ロシア」の表象について 大江健三郎の作品における環境汚染問題について 宮沢賢治童話の世界	
2013年 卒業生	2009年	日本語				日本語とブリヤート語の慣用句の比較研究 現代日本語における経済学専門用語の構成的な特徴について 漫画の擬音語・擬態語の特徴について 現代日本語における「身体」の表象について 日本語の諺の翻訳方法	
						日本文学	有島武郎の作品におけるキリスト教の役割について 小松左京著『明日泥棒』とイワン・エフレモフ著『アンドロメダ星雲』における「未来」の比較研究 平塚らいてうの作品における女性解放運動 桐野夏生の作品における「追放人」の表象について 三島由紀夫の作品におけるSM思考について 日本の「怪談」の特徴について
							日本文化

国立大学東洋学部の機関誌である『BSUの東洋学』、『東方アジア』、『東洋学の教授方法』の3誌が用意されている。また、学生の口頭発表の場として、ブリヤート国立大学は、毎年5月に「アジア太平洋地域の過去と現在」という国際若手研究者学術会議を開催している。

ブリヤート国立大学の日本学科の教員は、日本研究の分野において最高の成果を上げられる若手研究者を育てるために様々な試みを行っている。その結果としては、ごく近い将来にブリヤート国立大学出身の若手研究者は、ロシアだけではなく、全世界の大学や研究機関などで活躍することが大いに期待されている。